
幽世喫茶

墮天王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽世喫茶

【Nコード】

N1524S

【作者名】

墮天王

【あらすじ】

山の中腹に店を構える、幽世喫茶。

そこでは、不思議な珈琲が振舞われるという。

幽世喫茶を中心とした、ちょっと妖しいお話。

1話

まどろむ時間を、彼女は静かに流れるクラシックに耳を傾けながら過ごす。流れている曲の名前なんてものは知らない。彼女の母が買い集めていたのを、ただ流しているだけ。

店内に客はいない。外から聞こえてくる鳥達の囁きが心地よく、店内に差し込む陽光は、誰もいない店内で踊っていた。

しばらくすると、雨が降ってきた。喫茶店の雰囲気作りのために流されているクラシックの音が、かき消されてしまうほどの豪雨。

「うわぁ・・・ちよつと、降りすぎ」

彼女は、少しだけ嫌そうに眉根を細めた。しかし、別に外に出る用事もないので、雨が降ってもさしたる支障はない。

音楽を切る。晴れている日でさえほとんど客が来ないのに、この雨の中、客が来るはずがない。店を閉めて、部屋で書きかけの小説を執筆しよう——腰を上げたその時、生ぬるい風が彼女の頬を触っていた。

彼女は、表情を改めて座りなおす。客が来た——。

ギイという音を立てて、扉が開く。入ってきたのは、この五月、初夏にあたる季節にも関わらず、分厚い茶色のコートを着た、ずんぐりとした体格の人。顔は見えない。つばの広い帽子で隠している。

「いらっしゃいませ」

音もなく店内に入ってきたその人は、やはり音もなく近くのテーブルについた。不思議なことに、その人は一滴たりとも雨に濡れていなかった。それもそのはずだ。『それ』は、この世とは違う世界の住人。そこにいるのに、そこにいない。存在していたものの、抜け殻。彼女は、『それ』を認識し、理解している。そして、この喫茶店での客のほとんどが『それ』と同様の存在ばかりなのである。

一杯のコーヒーを『それ』に差し出す。幽世喫茶のメニューの一つ、『幽世珈琲』である。優しい匂いが、白い湯気となり、『それ』を優しく包む。『それ』は、笑っていた。コーヒーの黒い水面に、望んだものが見えたのだらう。

彼女がカウンターに戻り、振り返るともう『それ』の姿はなく、外から湿っぽい空気が流れてくるのみ。

「ありがとうございました」

残されたのは、満足げに微笑む彼女と、空になった珈琲カップ。

ここは幽世喫茶。

温かいコーヒーを出すお店。

END

2話（前書き）

今回は、可愛い付喪神が登場するお話。

2話

最近、不思議な事が起こる。

パソコンに向かって執筆作業をしていると、突然珈琲のいい匂いが漂ってくるのだ。後ろを振り返ると、テーブルに淹れたばかりだと思われる珈琲が一つだけ置いてあるのだが、彼女以外の存在は認めない。

最初は、自分で淹れたのを忘れたのかと思った。だが、珈琲の味がまるで違っていた。びっくりするぐらいに美味しい。喫茶店のマスター代行の彼女が嫉妬するほどに。

そんなことが、何度も続く。

怖いということはなかった。彼女は、『家にブラウニーが住み着いたのか』と笑っていた。ブラウニーとは、妖精の名前である。日本の座敷童子に近い存在だ。

放っておいても、実害はない。逆に温かい珈琲が、何もせず飲めるのはとてもいいことである。しかし、彼女としては『良く』なかった。

プライドの問題もある。自分よりも美味しい珈琲を淹れる存在が、身近にいるのだ。少し、腹が立つ。しかし、それよりも度合いが大きい理由、それは『好奇心』である。

ブラウニーなのか、座敷童子なのか――どんな存在かはわからないが、美味しい珈琲を淹れる『それ』が、どんな姿をしているのか、興味が尽きない。しかし、問題があった。

どうやって、相手を捕捉するのか。

何の前触れもなく、珈琲を置いていく神出鬼没の相手。正直、打っ手が無いのが現状である。

誰もいない店内。カウンターに上半身を預けて、ぼんやりと考える。すると、馬鹿にしたように、すぐ横に珈琲が出現した。腹立たしいが、珈琲は飲む。捨てるのはもったいないし、捨ててしまつて、

もう出なくなってもらっても困る。

珈琲を飲みながら気配を探ってみるが、やはりなにも感じない。ふう……と溜息を一つ。彼女の息が、珈琲の湖面を揺らす。その揺らぎを見つめているうちに、試していない事があることに彼女は気付いた。

思いついたら、即実行。

幽世喫茶のメニューの一つ、『幽世珈琲』。普通の豆、普通の焙煎方法、普通の淹れ方。ただ違うのは、彼女の指。幽世の調べを奏でる事ができる、その指が触れたとき、普通の珈琲は、『幽世珈琲』という異質なものに生まれ変わる。

珈琲を誰もいないテーブルに置いて、カウンターの陰に隠れる。後は、待つのみ。

穏やかな昼下がり。眠気が差してくる。うつらうつら。睡魔に抗い続けること、二十分ほど。彼女は、珈琲の水面が揺れた『音』を聞いた。

現れた――。

勢いよく立ち上がり、相手を確認する。

テーブルに座って珈琲を飲んでいたのは、舶来の人形がそのまま大きくなって座っているような錯覚を抱かせる、綺麗な白人の女の子だった。髪は、肩にかかる程度で金髪。サファイアのような美しい青色の瞳をまんまるにして、彼女を見ていた。

「……あ」

少女のか細い呟き。

少女は、首を小さく傾げて微笑んだ。

「見つかってしまいました」

「女の子だったのね。ヒゲもっさりのお爺さんを期待していたのに。残念」

「期待に添えなくてごめんなさい」

彼女は、少女を上から下まで眺めて、ふむとなにやら納得した様子。

「まあ、売り上げには貢献してくれそうね」

少女は笑みを崩さなかった。多分、彼女の言っている意味が分からず、笑って話を流しているのだろう。

「この珈琲、とても不思議。ずっと……ずっと昔に住んでいた、港町が克明に浮かんだわ」

少女の言葉に、彼女は満足げに微笑む。そして、少女は彼女の微笑みに見守られながら、消えていった。残されたのは、彼女が用意した珈琲のカップとソーサー――。

「あら……無くしたと思っていたら」

それと彼女が愛用していた、マイセンの珈琲カップとソーサーだけであった。

ここは幽世喫茶。

可愛い付喪神つくもがみがいるお店。

END

妖は憂う（前書き）

これから、主人公の名前が出てきます。今回の話は、ある妖のお話です。

妖は憂う

とある山の中腹に店を構える幽世喫茶。山奥にあるため、そこに喫茶店があることを知っている人は、ごく僅か。なにせ、近所の人が――。

「うおっ?! 喫茶店が! いつのまに?!」

と、驚くほどである。それで経営が成り立っているのかというと、全然成り立っていない。ただの張りぼてのようなものである。それでも一応意味があり、だからこそいまだに営業している。

ここは幽世喫茶。人だけではなく、妖相手にも珈琲を出すお店。今日のお客様は、いつもよりもちょっぴり珍妙です。

ああ――。

なぜ――だ――。

私は――。

もう――。

何も奪いたくない――。

だから――。

放っておいてはくれないのか?

人の子よ――。

ズン――と、巨大な石が落下して大地を揺らすような音が響いた。外を見ると、鳥達が慌てて、真っ青な空へと逃げていくのが見えた。その狭間に、彼女は声を聞いたような気がした。

「……何かしら」

書きかけの小説を保存して、パソコンの電源を落とし、店へと出る。マイセncアップの付喪神であるマイが、それに気付いて首を傾げた。

「どうされましたか? お客様は、まだいらしておりませんが」

彼女が、ぐうたらな生き物である事を、マイは良く知っている。

マイが化生してからというものの、この店の清掃、さらに家事まで全てマイがこなすようになっていた。

ボサボサの髪をかき揚げ、彼女は椅子に腰をかけた。

「妙な気配を感じたから、客が来るかもしれないと思って」

「マイは、特に何も感じませんでしたよ」

「なら、気のせいなのかもしれないわね」

そう彼女は言ったが、部屋には戻ろうとはしなかった。カウンターの奥の椅子に腰をかけて、乱雑に積んである小説を読み始めた。マイも気を取り直して掃除を再開する。それから、二十分ほどが経過した。扉が、ギィ——と軋み、続いてカランコロンと鐘の音が鳴る。

「いらっしやいませ」

マイが元気よく挨拶する。

客は、髪を短く切り揃えた女性だった。男物のスーツを身に纏っているが、ボロボロである。ぶらりとぶら下がった左腕を抱くようにして入ってきた彼女は、か細い声で『電話を……』と呟いた。

「マイ、電話だって。私、奥いるから、適当に対応しておいて」

「マスター？」

慌てたように彼女が部屋の奥へと逃げていこうとする。しかし――

「兎渡子……？」

彼女は足を止めた。しかし、振り向かない。女性は、少し急ぎ足になって近づいていく。

「兎渡子なんだろう？」

諦めたのか、彼女は溜息を吐いて振り返った。諦念の表情だ。

「久し振り……」

「あ、ああ……久し振り。元気、それで……あ、うん、良かった」

女性は、歯切れが悪い。曖昧に笑い、電話を指差して『借りるわ』とこまかすように言った。

電話をかけた後、女性は疲れたように椅子に座った。そんな女性に、マイは彼女が淹れた珈琲を差し出した。

「ありがとう。兎渡子と契約しているのか？」

一目で、マイを人間ではないと見抜いたようである。

「えっ？ 契約とか……私……付喪神ですから。勝手に憑いているというか、居候です」

「そう、兎渡子の下にいるなんて、変り種だな。アイツ、変な奴だらう？」

「いえ、そんなことは」

「その顔は、ちよつぴりそう思っているという顔だな。いいんだよ、兎渡子は誰もが認めるド変人だから」

「その折れた腕、へし曲げるわよ」

顔色一つ変えず、彼女は言う。それを女性は指差して苦笑した。

「見ろ、あれがアイツの本性だ。最低のサド野郎なんだよ」

「怪我人は、黙ってなさいよ」

マイは頭を下げて、カウンターへと戻っていく。女性は、珈琲が湛える黒い水面を見つめた。

「……兎渡子、もう戻る気はないのか？」

「ゴメン」

「謝らなくていい。兎渡子がそう決めたのなら、仕方ない」

「それ、誰にやられたの？」

「厄神社に新たな主が現れてね、そいつにやられた。兎渡子がいれば、あんなのには負けないんだけど……」

女性は、珈琲を口に含んだ。その瞬間、爆発するように膨れ上げる記憶の渦。

兎渡子、兎渡子、兎渡子……。どれも兎渡子の顔ばかり。女性は、涙を零した。

「……やっぱり、嫌だよ」

「あ、間違えて幽世珈琲を……」

彼女は、女性に幽世珈琲を飲ませたことを後悔した。しかし、今

更どうしようもない。女性の荒ぶる感情を見つめる事にした。

「どうして、私の前からいなくなっただよ。私、兎渡子の力になりたかったのに。兎渡子を支えたかったのに。兎渡子のいない世界なんて、暗闇ばかりだよ」

「おれんは、そうやって私のために己を削っていくから……私は嫌だったの。私が、おれんを殺しているような気がして……もう、私は十分おれんに救ってもらったから。だから、もういいの。おれんは、自由に生きなよ」

「マスター」

震える彼女の手を、マイは静かに握り締めた。マイは、首を横に振っていた。それがなにを意味していたのか——気づいたとき、彼女も涙を流していた。

「そうね、違うわ。私はもう……傷つきたくなかっただけなのね」

彼女は、女性が口をつけた珈琲を、口に含んだ。そうすることで、女性が見た光景を見ることが出来るのだ。

「おれん、私、ここで珈琲を淹れることにしたの。姉を守れなかった力を捨てて、もう一度この指で出来る事を模索した結果でね……割と気に入っているの、この珈琲。素敵な音色だと思わない？」

「兎渡子らしい、悪趣味な味がする」

女性は、苦笑していた。

「まったく、素直に『おれん、超感激』とか言えないの？」

「なんだそれ？ 何人だ、キモ過ぎるだろう」
なにじん

『でも』、と女性は続けた。

「悪くは……」

頭を横に振る。

「私は好きだ」

そう、言い直した。彼女も、嬉しそうに微笑む。

「さてと、おれん。怪我が治ったら、また来て。私、この幽世珈琲で出来ることを見極めたいから」

「別にいいが……なにをするつもりだ？ まさか、私を使って人体

実験とかはやめてくれよ？」

「それはそれで楽しそうだけど……」

「い・や・だ！ 基本的な人権を主張する！」

「冗談よ。相手は、おれんを負かした妖よ。私の珈琲を飲ませてみたいの」

「……そのほうがよっぽど冗談だ」

自信満々に彼女が言うものだから、女性はそれしか言えなかった。

三日後――。

「来たぞ」

女性――おれんは、やってきた。腕を組み、入り口で仁王立ちである。

「おれん、腕折れていたんじゃないの？」

「術と気合、あと常時エネルギーチャージ（食事）で、完治だ。除霊屋を舐めるな」

「除霊屋でもそれを無茶だと……ふっ、おれんに『無茶をするな』とか、言っても仕方がないか」

彼女は、すっぱりと諦める事にした。

「マイ、少し出かけてくるから。留守番、頼んだよ」

「私も一緒にしてはいけないのでしょうか？」

彼女は、マイの頭を優しく撫でる。

「あんな所に近づいたら、穢れてしまう。私たち人間と違って、一旦穢れたら戻れないでしょ？ だから、待っていて」

今から、おれんを追い払った主に会いに行くというのに、彼女は一点の曇りもなく笑って見せた。マイは、彼女を信じることにした。

「イエス、マイマスター」

彼女は、おれんを連れて喫茶店を後にした。

「……勿体無いぐらいにいい子だね」

「あげないからね」

「妖なんて、やると言われても断るよ」

タバコを取り出して、くわえるおれん。露骨に彼女は嫌そうな顔をした。

「タバコ、吸い始めたの？」

「妖避けだよ」

「なら、香でも焚けばいいじゃない。体に悪いわよ」

「香じゃ、気が紛れないんだよ」

おれんは、紫煙をぷかぷかとくゆらせた。

厄神社は、幽世喫茶から二十分ほど行ったところにある。半分かけた鳥居に、穴だらけの社。陰鬱な雰囲気、べつとりとまとわり付いてくる。ここは、山の掃き溜めだ。山全体に悪いものが蔓延しないようにするための、壺のようなもの。ある程度澱みが溜まれば、除霊屋が一掃してくれる。ただ稀に、簡単には一掃できないような大物が流れ込んでくる事がある。おれんを打ち負かした奴も、その一種なのだろう。

強い瘴気で景色が歪む。彼女は口をハンカチで塞ぎ、おれんはマスクを付けた。

「……この瘴気、半端ないわね」

「首にかかった賞金は、四千万だ。元々、八女の辺りにいた奴で、何度も被おうとして被えず、三十年。そんな奴だ。考え直したらどうだ？」

「顔を見て、話してから考えるわ」

「それじゃ、遅いだろう」

社に近づき、そして気配を辿って、社の左側に迂回する。強い瘴気を放つ存在は、社の軒下に腰掛けていた。ボサボサの髪が顔の左半分を覆っており、右目だけがギラリと光る。小汚い灰色の着物を着た、身長百七十センチ程度の男——のようだ。瘴気がなければ、浮浪者と間違いそうな格好である。

『また来たのか、人の子よ。こりない奴だ』

「妖風情が……人間様を舐めるなよ——」

「あ、馬鹿っ！」

止める間もなかった。おれんは刀を抜いて、妖に斬りかかっていた。妖はそれを右手で受け止める。ぎらりと光る銀色の鋭利なもの。それは、妖自身の爪のようだった。

「ちよつと、おれん！ なにさかつてんのよ?!」

「気が変わった。三枚に下ろして、ミキサ―処理して、川にばら撒いてやる！ 小魚の腹の中で、おいしく分解されちまいやがれや！」

「やめろつて言っでんでしょうが、この発情したメス犬!!」

手近な石を掴んで、彼女は投げつけた。ゴンと、頭部にヒット。頭を抱えてうずくまったかと思うと、おれんは投げた石を掴んで、彼女の元まで戻ってきた。

「お前、こぶし大の石とか、あたり所悪かったら死ぬぞ?」

「私は、おれんを連れてきた事を心の底から後悔しているわ。もう、帰れ」

『……ここは、遊びに来るような場所ではないぞ。早く家に帰れ』
妖にまでそんな事を言われる。おれんが、再沸騰する。

「あんだと……?!」

「おれん！ アレ、久し振りに読みあげられたいわけ?」

おれんの動きが、面白いように固まった。

「……アレって、アレか?」

「それ以外の何があるのよ」

「まだ持っていたのかよ!」

「あんな面白いもの、早々に捨てられないわよ」

「酷い！ 兎渡子のこと、見損なつたわ!」

どうやら泣き出すと、口調が変わるようである。

「分かったから、どいてどいて。話が……」

まだ文句が言いたそうなおれんを押しつけて、気づく。妖は、優雅に足を組んで座っており、微妙に笑っていたのだ。

『気が済んだか? 喧嘩の続きは、帰ってすることだな。騒々しいのは嫌いではないが、女の声は、頭に響く』

「割と話を通じるみたいね。私の名は、乙衣兎渡子。あなた、名前

は？」

『……タカだ。こんな私に、討伐以外のようでもあるのか？』

「営業よ。私が淹れた珈琲、飲んでもらいたくてね」

妖は、大笑いした。

『いかれた女だな。どういう教育を受けたのだ？』

「言っておくぞ、クソ妖。コイツとは同郷だが、いかれているのはコイツだけだ」

「おれん、あとで泣かすね」

笑顔で彼女が言うものだから、おれんはまた面白いように動揺する。

「このド変態！ 骨は、拾ってやらないからね！」

彼女は、水筒に珈琲を入れて持ってきていた。それを紙コップに注ぎ、妖に差し出す。珈琲の湯気が、瘴気を薄めているのが分かる。

『なんだ、この怪しげな珈琲は？』

「私が淹れた、幽世珈琲よ。一番見たい記憶を、鮮明に蘇らせる事ができるの。試してみない？」

妖は、とりあえず受け取った。しばらく珈琲を見つめた後、にやりと笑った。

『まあ、いいか。飲んでみよう』

珈琲を口に含んだ瞬間、妖は目を見開いた。見えたのだ。失ってしまった彼の過去が。

彼を崇める人々。麓の村人の生活を眺める毎日。急速に進んでいく近代化。削られてゆく山。遠くに鳥が見えた。しかし、その鳥がなんの鳥かまでは分からなかったが、彼にとってそれはとても大切なものだったように感じていた。

妖の瘴気が、僅かに削げた。

『……これは！』

「私の店の常連になりなさい。ずっと飲んでいれば、きっと戻れるわ。本当の姿に」

『私は、この有り様なのだぞ？』

「別に構わないわ。お客なんて、ほとんど来ないし。常連さんが出るのと、嬉しいし」

彼女は、屈託なく笑って見せた。妖もそれにつられて、うっすらと微笑んだように見えた。

『本当に…… 本当におかしな女だ』

ここは幽世喫茶。

穢れを背負ったモノも訪れるお店。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1524s/>

幽世喫茶

2011年4月4日19時56分発行